

平成 26 年 4 月 30 日

第 8 回 仙台市中学校長会総会 挨拶

会長 阿部英伸

厳しい冬を乗り越え、桜花爛漫のときが過ぎようとする今日、この日の柔らかな雨は、後に続く百花繚乱を予感させるものでもあります。

本日、ここに教育局次長 熊谷祐彦 様、学校教育参事 新山弘幸 様をはじめ、各関係団体の皆様、さらには、歴代会長の皆様の御臨席のもと、仙台市内 65 名の中学校長が一堂に会し、第 8 回仙台市中学校長会総会を開催できますことは、何よりの喜びと存じます。深く感謝申し上げます。

この春、30 有余年の長きにわたり教職の道に専心努力され、御勇退なされました 15 名の先輩の方々。皆様が私たちにお示しになった教育への情熱、使命感に裏打ちされた姿を脳裏に思い浮かべるとき、私ども会員一同、改めてその御功績に敬意と感謝を表すものであります。

また、この 4 月の人事異動で昇任されました 15 名の校長先生方、皆様を新会員としてお迎えすることができ、心を強くしているところでもあります。これから皆様には、学校経営の最終責任者・最高責任者としての意味を自らに問う日々が続くと思います。眼前の課題に怯むことなく、しかし、奢ることなく、これまで培われた皆様の英知をひたむきに発揮され、本会に清新なる風を吹き込んでいただきますよう御期待申し上げます。

さて、今、我が国の状況は、政治・経済が混沌とし、その出口を求めて模索を続ける「先行き不透明な時代」であり「閉塞する社会」といわれています。年月だけがいたずらに過ぎていく感も否めません。一方では、情報化、グローバル化が進展し、一国、一地域の状況が世界に影響を及ぼす時代、持続可能な社会の在り方が世界的に広がりを持ち、教育においても、「持続可能な開発のための教育」への取組が始まり、世界市民としてのキー・コンピテンシーの育成がグローバルスタンダードとなりつつあります。

我が国の教育施策動向に目を向けますと、教

育法令の改正が続いた後、教育委員会制度を始めとする教育諸制度の改革、いじめ防止基本方針の策定、道徳の教科化、土曜授業の実施、政令市への事務移譲など、様々に重要な決定が続きます。更には、学習指導要領の改訂に向けて、作業部会での論議も架橋に入ってきている状況です。

その教育を取り巻く状況を踏まえ、ここに、仙台市中学校長会として取り組むべき方向性を活動方針案として、その基本理念を宣言決議案として、この後、具体的に提案させていただくこととなります。

それに先立ち、ここでは三つの視点から所感を述べさせていただきます。

まず、一つ目は、「継承と拡充」についてであります。

今年度は、現行の学習指導要領全面実施と仙台市教育振興基本計画が策定されてから 3 年目を迎えることとなります。これは、あの未曾有の大震災の後、我々被災地の教育者が、教育の復興にどこまで取り組んできたかが問われる試金石ともなる年度でもあります。「生きる力」を「生き抜く力」としてどれだけ子供たちに育んでこれたか。また、教育振興基本計画に係る成果目標はどこまで達成できているのか。まず、年度初めにおいて、これまで我々が営為取り組んできた学校経営の有り様を改めて現状分析し、今、立っている位置を見定める必要があります。平成 24 年度、庄子会長は、「今年は復興元年」と獅子吼され、震災後に沸き上がった子供たちの社会貢献意識の高揚をみて、次のように話されていました。「ありがとうと言われ、社会のために役に立てた喜びを感じ、自己有用感に繋がったこの体験を大切に、継続させることが大切である」と。平成 25 年度、日塔会長は、「我自ら先頭を切らん」との覚悟で、「創造ある教育復興を」と我々校長の意識を鼓舞し続けていただきました。先生が立ち上げた本会のスローガンは、今も厳然と生きております。

その意識を我々は継承し、仙台市中学校長会が、その組織としてあることの存在意義を、会員各々が我が心に深く留め、子供たちの未来と幸福を見据えながら、仙台市の教育振興及び教育諸課題の解決に向けて、更なる歩みを踏み出していきたい。そう考えております。

次に、二つ目は、「発信と創造」であります。

仙台市中学校長会は、平成 19 年度に宮城県中学校長会から分離・独立して以来、8 年目を迎えます。これまで研究協議会は県中学校長会との共催で実施して参りましたが、今年度から仙台市中学校長会単独での研究協議会を開催いたします。また、平成 28 年度全日中研究協議会宮城大会に向けて宮城県中学校長会と相互連携・協力した準備が開始されます。さらには、宮城の中学校 70 年記念事業として平成 27 年度完成を目的に記念誌の編集事業も始まります。そして、平成 29 年度大都市中学校長会連絡協議会仙台大会に向けての準備も開始されます。それぞれにプロジェクト型の組織編成で、いよいよ動き出します。また、平成 29 年度政令市への事務移譲に伴い、全日中における政令市の立ち位置についても、大都市中学校長会の各都市とともに見据えていくこともあるかと思いません。

最後に、三つ目は、「人材と気概」であります。

「子供たちにとって最大の教育環境は教師自身である」とも言われるとおり、子供たちの社会的成長にとって教師の存在がいかに大きいかということは、論を俟つまでもありません。そのためには、教師自身が自ら学び続ける存在であるかが問われます。所属職員の持ち味を見抜き、適材適所にして、しかも、それぞれのライフステージにおいて求められる職能成長を遂げさせていく、組織マネジメント力を我々校長は日々磨いていくことが必要であります。

あ のとき、多くの教師は、「目の前の一人をどこまでも大切にしていこう」「人の不幸の上に自分の幸福を築くことはしない」との思いの中、避難所運営に獅子奮迅にして、ひたむきな取組は、まさに「教師の底力」を実証した姿だと思っています。一方、「九仞の功を一簣に虧く」残念な出来事にも直面しました。

しかし、それだからこそ、今、我々は、現場のことを知っているのは我々自身であるとの気概に奮い立ち、奢ることなく、ただひたすらに「現場の力」を発揮していく時であると、心深く留めて参りたいと思っております。

教育施策が林立し、時として眼前に立ちほかかる教育課題に後ずさりしてしまいそうにもなりますが、宮城県中学校長会、仙台市小学校長会との協力のもと、共々に「負けじ魂」を燃え上がらせて参りたい。そう思います。成果主義や市場競争原理が教育界にいかにか押し寄せようが、我々が目を向けるべきは目の前の子供たちであることを決して見失うことなく、「人となれ人、人となせ人」の精神で、地道ではあっても、共々に教育の道を踏み固めていきたいと思えます。「人は石垣、人は城」のとおり、仙台市中学校長会も「人を以て城となす」の気概で取り組んで参りたいと思えます。

最後に、本日、ご多用の中、御臨席を賜りました熊谷教育局次長様、新山参事様、各関係団体様、そして歴代会長の皆様には、今後も仙台市中学校長会に御指導、お力添えをいただきますよう衷心よりお願い申し上げまして、挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。